

木打べし、巢草は野老の髭、又まゆるの毛よし、又美濃紙をほそぐたちて入もよし、子はうなぎの粉を交て、まづ二三日は七八分のゑにて飼立べし、其中にもよわき子、つよき子にて餌も段々計ひ有べし、巢をなす頃はうなぎを交て用ゆべし、庭籠にては如何程つよき餌を飼ふとも障にならず、其外いろく飼かけ、鳥によりて心得有事なれば、ひとつにおほへては中々ゆかざる物なり、第一鳥の氣をはかり、見る事をまらざれば、みな間違て、能産巢の鳥も巢をなさぬなり、まかし鳥ひよどりは、丈夫になすに、産巢は年々出来る也、能子そだてる雌は秘藏すべし、まれなり、凡子は産す、世にしまは、舞ながらつがふといふ者多し、夫ゆへ庭籠をひろくして能と言、みな偽なり、やはり留木の上にてつがふ也、見とめたる者むかしより少し、其外鳥の見やう、鳥鵞には秘事有口傳、とかく諸鳥ともに見様第一心得あり、

〔飼鳥必用〕鳥鵞

此鳥いつの比より日本へ渡し鳥といふ事、知りし人もなく、古老の人に聞傳へも無之よし、唐人長崎へ持渡りたるも無之、朝鮮産の鳥にても有間敷、今以江都にて子を生立、何れ此鳥、巢組生立方は末の人に極り、是迎も能き産巢之親鳥ある故、庭籠は九尺四方にて、にはこの内へ、植木をまばらに植込み、泊り木又は蜘蛛代にて、巢掛ケをし、巢草常にかはらず、其内にきよき白紙をさきて、ちらし置、是を是非巢の内へ紙を引、玉子を落すもの也、雌雄好合は、庭籠の内飛廻り中にて、喰合よふにしてかゝり候もの也、其時植木多は悪し、泊り木も澤山は不宜、玉子開わりかへり候上は、蜘蛛を飼、無油斷十二三日も過候は、取揚ゲ、さし餌にて飼生立る事、此さし餌には人々流義有り、東都櫻田久保町大坂屋善藏、岩次郎は、此鳥摺餌にて生立候事名人也、尤芝源助、丁海老屋市九郎と申者、諸所より此鳥の巢子生立方請合、さし餌飼に線香を立、初日は五六度も餌飼、漸く度數を重ね、盛長にまたがつて、餌も七分位にて仕立候よし、爰に又麴町平川町三丁目大和屋彌兵衛